

1. なぜ、自然体験活動を重視するのか

今、学校では、各段階で学力定着度調査がさかんに行われている。その重要性については周知の通りで、本校でも、学力向上の重要な柱に位置付けている。しかし、小学校段階ではあえて私は、こうした「見える学力」を支える「見えない学力」を構築することの重要性を本校の全人教育の基本理念としている。あのフィンランド教育の基本理念は、「聞いたことは忘れる。見たことは思い出す。体験したことは理解する。そして、発見したことは身に付く (To find is to use)」であり、大いに共感する所である。本校においても、本格的に学校林での活動を復活させて2年目となり、今、教育活動全体でのカリキュラム作りに着手したところであるが、子どもたちが自然から教授される発見は見違えるほど拡充されている。その「気づき」や「体感」が学びへのこだわりを生み、「意欲」を育てていく。その上に立ち本校では、全学級「自らの考えを持つ→伝え合う→学び合う」の授業を、PC や書画カメラ、小黒板を活用して行う学力向上の由木西メソッドを全教員が一丸となって作り上げてきた。もちろん、生きる力の育成において、学力だけが取りざたされるものではない。その全てを培っていく上で「自然体験活動は重視される価値をもつ」ことの検証を目指していきたいと考えている。

2 実践事例

① 食育を支える学校林

本校の自然体験活動を支える二本柱は学校林の森林体験学習と食育学習である。食育は市の研究協力校として発表するなど、全学年が様々な農作物を育てたり、学校林からの収穫を享受したりしている。そして、その食育の土作りに欠かせないのが、学校林の落ち葉拾いである。この活動は、全校児童がたてわりグループで45分間、学校林に入り、安全で安心な落ち葉を集め、翌年の畑の堆肥としている。



② 「木にも種類があることがわかりました。」

これだけ豊かな自然に囲まれている本校に通う児童でも、このような言葉が口から出てくるのが実態である。3年生は、理科の秋の学習として学校林の樹木の観察をしている。特徴のある「クヌギ」や「コナラ」を教えると子どもたちの観察眼が一気に広がり、「ここにもあるよ。」「あの木は何?」とたちまち違いを発見した声が溢れる学習に展開した。めいめいがデジカメに調べる課題を写し、教室に戻った。この学年の子どもたちにも、学校林の樹名板づくりに参加させようと考えている。



③ 「炭と灰のちがいがわかりました。」



本校の学校林の特徴は、竹が多いことである。何種類もの竹があるため、春には全校児童でタケノコ掘りを行っているが、その維持管理のために、高学年の児童は、自ら、竹を伐採して処理したり、眺望のよいエリアに、竹ベンチを設置したりしている。私は、この地域での竹林の役割を地域の方々と共有化していくキーワードとして「竹炭作り」があると考えている。6年生は、総合的な学習活動として今年から「竹炭作り」に取り組み始めた。タイトルの言葉は、その学習を通して、子どもたちの口から出たものである。今年、この学習に地域の方々の参画は実現しなかったが、この地域に息づいてきた「竹炭作り」なのでつながりを広げていけると確信している。

※関連・・・由木西小グリーンファミリーズ

④ 地域、保護者と共に学ぶ

学校林の季節の移ろいは驚かされるばかりである。こうした学校林の四季を児童、教職員、保護者、地域の方々が共に学ぶ自然観察会はすっかり定例化した。その様子は、12/3の読売新聞多摩版でも取り上げられた。

3 成果と課題

自然体験活動のもつ教育力を本校の教育活動の基盤として位置付ける全人教育を推進してきた結果、子どもたちの成長を看取っていける様々なエピソードが共有化できたことが成果であり、そのことをさらに検証していくことが課題となる。